◆キーワード　アルタイ・エゼン／ハーンⅠ／ハーンⅡ／「アルタイ賛歌」／叙事詩

「アルタイ讃歌」におけるアルタイ・エゼン

斯　琴

一・はじめに

モンゴルの信仰観念と習慣の研究は、アルタイ系諸民族の文化に関する研究において極めて重要であり、その詳細的な考察に当たって、アルタイ山脈周辺のモンゴル諸集団に伝承されている「アルタイ讃歌」は肝要な資料である。本稿では、「アルタイ讃歌」の二つの伝承の分析を通じてアルタイとそのエゼン[1]の特質について考えたい。

モンゴル社会において、叙事詩を語る前後に讃歌あるいは祝詞を称えることは多く見られる。東モンゴルのホルチンでは、叙事詩の序章にマウス（マングス）のことを唱えるに比して、西モンゴルでは、新疆のオイラト・モンゴルは『ジャンガル』の前に「ジャンガル讃歌」(jangyar-iyn maytayal) を称え、モンゴル国のオリヤンハイ、バイド、ドゥルベドなどの諸集団は叙事詩の前に「アルタイ讃歌」を語る。そこで、アルタイ山脈の北麓のオリヤンハイ、バヤド、ドルベド集団では当然ながら、自らの生活環境を賛美するに対して、西モンゴルのほかの集団、たとえば中国新疆自治区のオイラトでは、叙事詩の前およびその冒頭で多くの場合はアルタイ山脈が称えられる。アルタイ山脈は常に叙事詩の序章に登場することは、モンゴルにとどまらず、シベリアのヤクート族、トバー族、ハカス族にも同様に見られる［D.taya二〇〇五：三七］。したがって、アルタイ山脈はアルタイ系諸族の叙事詩と深く関わることは明らかであり、その中で、この山脈の周りで暮らす諸集団の生活において、アルタイ山脈はもっとも拠所であって、それが「アルタイ讃歌」及びその文化的な生活の役割によって明らかになっている。そのため、本稿でモンゴル国西部のオリヤンハイ、バヤド、ドゥルベドなど諸集団に伝えられる「アルタイ讃歌」を分析することはアルタイ系諸民族の研究において重要な意味を持つ。

また、「アルタイ」とモンゴルの叙事詩の関わりから考える

なら、本稿のタイトルでも示したように、アルタイのエゼンは興味をそそられる。このエゼンは「アルタイ讃歌」の中で「十三の雪山の主」アリヤ・ホンゴルという名で登場する。

周知のとおり、モンゴルの叙事詩「ジャンガル」のなかで、ジャンガルに相次いでホンゴルという人物が登場する。そして、この叙事詩では、「トゴス・アルタイ」と「アラサラン・アルタイ」という二つの地名[2]が現れ、前者はジャンガルと、後者はホンゴルと関係が深い。たとえば、「ジャンガル[3]」では、ジャンガルの世代から次の世代に移り変わったとき、トゴス・アルタイの領主であるジャンガルは、アラサラン・アルタイ・ジョウ[4]の領主であるホシュー・ウラン・ハーンに、アラサランの国印[5]を渡した。つまり、ジャンガルの世代では、トゴス・アルタイの領主であるジャンガルがすべてを司るハーンであったが、その後継ぎにアラサラン・アルタイの領主はハーンの権力が渡されたのである。次代のハーンになるホシュー・ウラン・ハーンとは、ジャンガルの部下であるホンゴルの息子であることが伝承の中ではっきりとされている。したがって、アラサラン・アルタイはホンゴルの領地であることが言うまでもない。

叙事詩のなかで、このホンゴルという勇者は常に「アラサラン」（獅子）という語で修飾され、アラサランのアラグ・ウラン・ホンゴルと呼ばれる。また、ジャンガルの国印は「アラサラン・タマガ」と呼ばれている。そこで、この領主と領地そして国印は共通に「アラサラン」というシンボルを持つことは、何かの質的な関連をもっているように思われる。

まして、アルタイ山脈はオイラト・モンゴルの口承文芸のなかで常に「白雪の山」あるいは「十三の雪峰」と称され、なお民謡のなかで「白雪の山の上で、ツァガン・アラサラン（白い獅子）が気骨稜々[6]」と伝承されている。この語句では、アルタイ山脈と思われる白雪の山は獅子の気魄に満ちると描かれた。

ドイツ人の研究者であるエラによって録音された資料にオリヤンハイ集団の有名な叙事詩の語り手であるウルトナサト氏が次のように語った。

「西モンゴルでは、叙事詩を語る前必ず『アルタイ讃歌』を称える。なぜなら、人間はアルタイの力に恵まれて生きているからである。このアルタイにエゼンがいる。アルタイは十三の白雪の峰がある。そのなかに兄たるアラサラン・ツァガン・ツァスト・ウール[7]がある。この兄の峰にアルタイのエゼンたるアリヤ・ホンゴルが住んでいる」［エラ・シュベレテ　二〇〇七．四．十五］。

このように、アルタイ山脈についてアラサランの気迫という描写、アルタイのエゼンたるアリヤ・ホンゴルおよび叙事詩「ジャンガル」に登場するホンゴルという人物には、その修飾語に「ホンゴル」と「アラサラン」といった二つの類似点が見られることは興味深い。したがって、アルタイと叙事詩の関連が深いと思われる。

二．「アルタイ讃歌」について

（一）オリヤンハイ、ドゥルベド、バイド集団について

右記で示したように、本稿に扱うテキストはモンゴル国西部のアルタイ・オリヤンハイ、ドゥルベド、バイド氏族のなかで伝えられている。これらの氏族はいわゆる西モンゴルに属する下位集団である。オリヤンハイ族について言えば、「十三―十四世紀に狩猟を主な生業とする森のオリヤンハイ（原文オリアンハイ）と、遊牧を主な生業とするモンゴル系オリヤンハイがあった。…十七世紀オリヤンハイ人は、ハルハのホトゴイト部か西モンゴルのジュンガル部に属したが、十八世紀半ばまでに清朝に服属した。清朝は彼らを三部に分け、それぞれ現在のロシア連邦のトゥバ共和国からモンゴル国のフブスクル湖地方までの一部をタンヌ・オリヤンハイ、（現在の中国とモンゴル国の領域にある―筆者）アルタイ山脈地方の一部をアルタイ・オリヤンハイ、現在のロシア連邦のアルタイ共和国に属する一部をアルタイ・ノール・オリヤンハイと呼んだ」［上村明　二〇〇七．四．二九］。現在、モンゴル国の西部では、ホブド県のドート・ソム[8]とムンヘハイルハン・ソム、またバヤンウルゲ県にアルタイ・オリヤンハイ人が数多く住んでいる。アルタイ・オリヤンハイの叙事詩の語りは現在モンゴル国の伝統芸能を代表するものとされている［上村明　二〇〇七．四．二九］。

ドゥルベド集団の先祖は西モンゴルのエセン・ハーンの長男か孫に当たるものとされている［オイラト・モンゴル史二〇〇〇：二一〇］。この集団は西モンゴルのチョロス族から分離し、十六世紀末から十七世紀のはじめ、勢力がだんだん強くなり、西モンゴルの諸集団のなかで重要な位置を占め、主にイルティシ河の上中流を遊牧していた。ドゥルベド人は現在中国の新疆自治区と内モンゴル、モンゴル国のホブド県とオブス県に散在している。

バイド集団は、十二世紀もしくはそれより早い時期に名が知られたモンゴル族の下位集団であり、「元朝秘史」などの史書に登場した人物名にその集団名が表示されたが、集団活動が明らかでない。現在、バイド人は内モンゴルの東部にも散在し、主にモンゴル国のオブス県に集中して暮らしている。

（二）テキストについて

本稿で扱う「アルタイ讃歌」は主にモンゴルの西部に分布するアルタイ・オリヤンハイ、バイド、ドゥルベド集団のなかで伝えられている伝承であり、それに二種類がある。一つは、アルタイ・オリヤンハイ集団のなかで伝承される「アルタイ讃歌」であり、これはどんな叙事詩の語りにしても、その前に必ず語るものとされている。この伝承はアルタイの自然の豊かさや住民生活の安泰を称える内容に限られ、本稿ではテキスト一であり、ここで「アルタイ讃歌」と呼ぶことにする。もう一つは、本稿におけるテキ

スト二―四で、主にバイドやドゥルベド集団の中で伝えられる特定な叙事詩である。この伝承の冒頭にテキスト一の「アルタイ讃歌」に当たるものが語られ、そのあと叙事詩の物語が展開される。本稿でこれを「叙事詩アルタイ讃歌」と呼び、分析にあたってテキスト三を中心にし、テキスト二、四の内容を補助的に扱う。「アルタイ讃歌」においても、「叙事詩アルタイ讃歌」においてもアルタイ・エゼン（ヌシ）が主要な存在である。

本稿で扱う「アルタイ讃歌」の作成経緯を言うと、ツォロー（J.Čoloo）によって、モンゴル国のオリヤンハイ族の叙事詩の語り手であるJ.RinčinとAbirmidおよびバイド族の語り手であるO.Batuらに唄われた異伝を比較して、叙事詩の前に唱えられる「アルタイ讃歌」の完全版が編集されたのである。これは「叙事詩の前に言う讃歌」というタイトルで『モンゴル人民の英雄叙事詩』という本に編入された。

また、「叙事詩アルタイ讃歌」は藤井の研究によって提示された「アルタイ・ハイラハ」の三つのテキストである。一つは、ドゥルベド族の語り手であるペルレーによって唱えられる唯一の完全な口頭テキストであり、本稿におけるテキスト二である[藤井　一九九七：三二]。これは、モンゴル国立大学のŠ.dulm-aに一九八四年に録音された音声資料と藤井に一九九三年に採録された音声資料および後の再確認調査によって完成されたものとの結合である。もう一つは一九七一年に同じドゥルベド族に属するダミヤに唱えられた音声資料のテキストであり、本稿のテキスト三がそれであり、藤井の学位論文に提示されている。

そのほか、藤井は、ツェレレ（Čerel）によって一九六四年に出版され、後に「モンゴル民族口承文芸の精華」（yadamba一九七八）に再録されたテキストのストーリーを提示している。現時点で、このテキストを入手していないため、本稿においてテキストの梗概のみを提示し、参考することにとどめたい。これは、本稿のテキスト四に当たるものである。

ところで、「アルタイ讃歌」と「叙事詩アルタイ讃歌」という二種類の伝承のモンゴル語タイトルについて触れておきたい。藤井の現地調査によると、アルタイ・オリヤンハイ集団では「アルタイ讃歌」が「アルタイ・マグタナ」と言われるに対して、ドゥルベド、バイド集団では「叙事詩アルタイ讃歌」が「アルタイ・ハイラナ」と表現されている。「マグタナ」と「ハイラナ」はいずれも動詞の現在形（また未来形）だが、前者は「称える」を意味する動詞に対して、後者は叙事詩の語りの方法を示す動詞である。こうした、生活に密着する社会環境で使われている二語に対して、伝承の実存社会環境を越えて広く学術領域では「マグタル」（賛美）と「ハイラハ」という二語が用いられる。それが「アルタイ（ン）・マグタル」と「アルタイ・ハイラハ」と表現されている[J.Čoloo　一九八九：二二五―二二六]。したがって、多くの場合「マグタル」と「ハイラハ」は「マグタル」に集約される。その結果、「アルタイン・マグタル」（アルタイの賛美）が成立ち、これが日本語で「アルタイ讃歌」と訳されて

いる［藤井麻湖　一九九七：四九―五〇］。

（3）テキストの梗概

ここでテキスト一―四の梗概は、構成的に対応し合う各部を示した上、物語の流れにしたがって相互に比較し得る、意味的なまとまりを一つの単位にして表示したい。

「アルタイ讃歌」、すなわちテキスト一では、アルタイ山脈の自然風景や豊富な動植物、狩猟の様子、牧畜民の生活が描かれ、ここに登場するエゼンは永久に二五歳であり、素晴らしい淡黄色の駿馬に跨って常に行き来する存在である。このエゼンはアリヤ・ホンゴルとも呼ばれ、その加護に恵まれたアルタイの人々の幸福を賛美した。

このテキストは全部で四〇七行からなる韻文詩であり、そのなかで各部分に「わがアルタイとハンガイよ」[9]或いは「わがアルタイよ」という呼びかけが繰り返され、その数は二五回もなる。

「叙事詩アルタイ讃歌」、すなわちテキスト二、三、四でいずれも三部の構成である。第一部では、アルタイの自然と種々の家畜を称える。第二部では、三七七歳のハーン（以下ハーンⅠとする）と后は老いたため、後継ぎのないことに悩んで、占い師のお告げによって神々に供犠を捧げる。その結果息子が生まれる。

第三部ではこの息子は両親の引きとめるのを無視して、遠征することになる。そこで、父に自分の名をもらい、娶るべき女が誰であるかが教えられて出発する。途中で、マングスを怖がる老人と出会い、彼の息子である勇者Yがマングスに殺されたことを知る（このマングスとはモンゴル口承文芸に登場する怪物のことである）。勇者Yを救いに行く途中、マングスに出会い、ハーンⅠの息子はマングスを殺す。ハーンⅠの息子は勇者Yを救い、親指の血を吸い合って義兄弟になる。それから、兄弟は目的である太陽の姫のもとへ行く。そこで、ライバルの求婚者を倒し、姫の父親が申し出た難問を果たして、嫁を連れて故郷へ帰り、ハーンになる。これはハーンⅡとする。

三．「叙事詩アルタイ讃歌」におけるアルタイ・エゼン

前述したとおり「叙事詩アルタイ讃歌」は基本的に三部の構成になっている。そこで、「叙事詩アルタイ讃歌」のなかでアルタイのエゼンとハーンⅠとその息子のハーンⅡはどのような関連で語られているかを見る。

第一部でアルタイの自然や人間の生活が描写され、平和や豊富さが称えられ、その際アルタイはエゼンとも、ハーンとも呼ばれて同一視されているように見えるが、その姿は具体的ではなく、抽象的な存在として示されている。

ところが、第二部ではアルタイのエゼン・ハーンとハーンⅠに深い関わりがみられる。その関係は捧げの行為の中で現れる。つまり、ハーンⅠは「捧げをすると子どもに恵まれるという予言を聞いて、大喜びで宴会を催す。その後、ハーンⅠは二五歳

に若返りになり、供犠に行く。ここで「宴会」という語はモンゴル語で「nair」と表現されている。この語は確かに「宴会」の意味だが、この宴会は祝宴にとどまらず、若返りをもたらした儀礼の意味を帯びていると考えられる。というのは、モンゴル語では祭祀のことも「nair」と表現するからである。たとえば、モンゴルの社会で重要なオボー祭祀は「oboγan nair」と表現する。また、「üres nair（ウレス・ナイラ）」は一定の時期に行われるのではなく、領主が即位するなど特別な場合に行われる祝祭のことである。こうした祭祀に、若者の合唱、格闘、競走が行われる。このような文化的な背景を考え合わせるなら、ここでハーンⅠの催した宴会は儀礼的な性格をもつと考えられる。

ハーンⅠはこの宴会の祭主となって、馬と共に「若返り」、ハーンは二五歳、馬は五歳の駿馬になる。そうして、ハーンと馬はアルタイの十三峰の最高の峰に行って供犠をする。この場所は天から一番近いところであり、ここでハーンは天、地、アター天、大黒天といった神々と並んでアルタイに供犠をする。

天にはラクダ、地には猪をそれぞれ一頭捧げ、アター天と大黒天とアルタイには同一の種馬と雌馬から生まれた十三頭の青馬、黒馬、淡黄色の馬をそれぞれ聖別した。[10] この十三頭の犠牲の馬は同一の父馬と母馬に生まれた「兄弟」であり、この兄弟の馬が「アルタイを十三周回って」集められ、アルタイのエゼン・ハーンに捧げた。ここで「十三」という数に象徴的な意味が込められていると思われる。なぜなら、アルタイには十三の峰があり、常に十三のアルタイと称されて、聖別の場所になった最高の所が「Ak-a（アハ）」となっているからである。このアハとは兄の意味である。このように、アルタイの山脈にも犠牲の馬にも「親族」のニュアンスが含まれていることから、「十三」の数には本質的な意味あると思われる。したがって、アルタイのエゼン・ハーンは十三のアルタイの上位に在って、全体に力を及ぼす存在であることが考えられる。

供犠の目的を達成してから、若返ったハーンⅠは駿馬を走らせて帰りの道を辿る。ハーンⅠは最高の峰から、自分の家の天窓から突き出た金の柱によって家に入るが、ここでテキスト二の内容を合わせてみるなら、ハーンⅠは最高の峰から順次降って最も低い峰に着き、そこで家の天窓に突き出た金の柱を目にする。それによって息子が生まれたことを知る。このことから、ハーンⅠは地上から天空へ動いたことが明らかであり、この道の上端がアルタイのエゼン・ハーンの位置にあたり、それに対して、ハーンⅠが戻った家は下端にあたる。そこに息子が生まれる。したがって、この息子はアルタイ・エゼン・ハーンから授かったことが推測できる。

第三部では、ハーンⅠの息子が遠征し、ハーンになる。これをハーンⅡとする。ハーンⅠの息子は「出会う敵を倒して名誉を守る」と言って、父の用意した弓矢をもち、母の用意した毛皮の服を身につけ、馬飼いの探し出した駿馬に跨って出発する。息子は十五の頭をもつマングスを殺して、マングスの妻と財産を我が物

にする。やがて、マングスの妻に子どもが生まれてハーンⅠの息子に仇を討つが、ハーンⅠの息子はことごとく退治する。それから、息子はマングスに殺された勇者Yを蘇生させて義兄弟になる。こうした兄弟二人は太陽の方角へ「太陽の姫」を娶りに行く。そこで、ガルディ（大鵬おおとり）、青牛、青狼を倒して、嫁と財産をもって帰り、父の後を継いでハーンとなる。これがハーンⅡである。ここで、遠征の意味を考えてみたい。

テキスト四の内容を合わせてみると、息子はハーンに「父のいる間に人を知ろう、駿馬の健在の間に土地を知ろう」と言い、「殺しあう敵、得る女」を探して遠征する。テキスト二の内容から考えれば、息子は出発してアルタイの十三峰の最高の峰に着き、南へ九十九年の行程（みちのり）の距離を、北へ八十九年の行程の距離を見渡して、東南方位に見えた敵に向かって旅を進んだ。このことによって、息子は水平方向に遠征することが考えられる。

こうした横へ広がる旅で、息子は殺し合う敵のマングスに出会い、まず三七七歳の父の名を上げ、その後自分の名を告げて、敵に立ち向かう。それから、息子はマングスに殺された勇者Yを蘇生させ、味方になる。こうして、ハーンの息子は敵が減り、仲間が増えることによって、自分の「力」が増加する。そのため、ライバルの求婚者に立ち向かうとき、勇者Yがハーンの息子の片腕となり、三種の怪物を征服することができ、嫁と財産を我が物にする目的を達成する。こうして、太陽の姫の所は息子の旅の終点となり、そこから帰ることによってハーン位に即位する。

伝統的な考え方では「一本の薪は火になれない、独身者は家をもてない」というように、結婚しない独身者は社会的な一人前に認められない。このように、息子は婚姻と遠征によって花嫁を得て父のハーンⅠの後を継ぐ。この遠い道程は、ハーンたる者が知力と武力の試練を受け、勝利を収める歴史である。

ところで、第二部では父のハーンⅠが天空へ垂直方向に動きをすることに比して、第三部では息子が水平方向に旅をすることが分かる。また、ハーンⅠの地位を継承することについて言えば、アルタイのエゼン・ハーンに授けられた「子ども」がハーンとなったことである。言い換えれば、ハーンⅡの生命はアルタイのエゼン・ハーンに授けられ、ハーンⅠと交代することによって改めて聖なる存在の庇護を受けることになる。

四．「アルタイ讃歌」におけるアルタイ・エゼン

ここで話を戻して、アルタイのエゼンとハーンⅠの関係について「アルタイ讃歌」と「叙事詩アルタイ讃歌」を考えてみたい。

アルタイ・オリヤンハイ集団で伝えられる「アルタイ讃歌」において、アルタイのエゼンはアリヤ・ホンゴルの姿で人格化されている。これは、淡黄色の駿馬に跨り、白い雪山に永久にエゼンとなって、俯瞰しながら常に行き来している二五歳の若者であり、彼は「子孫代々」永遠に老いることがない。この姿は「叙事詩アルタイ讃歌」の登場者であるハーンⅠの「二五歳

若返り」と一致する。前者において、「子孫代々」という表現から「生まれ変わる」という性格が考えられ、それが後者における世代交代のおりに「若返る」ことと合一すると思われる。

また、「叙事詩アルタイ」において、動物の聖別は「古い力」の再生と考えられる。というのは、ハーンⅠが若返る前には、聖なる力が弱まって子どもが授けられないからである。子どもが授けられるためには、ハーンⅠが若返りをして、犠牲動物との闘いに打ち勝つことが必要であった。すなわち、天と地に供犠（くぎ）をする際、ハーンⅠは犠牲動物と格闘し、「三十三の占い師のお寺から、このような良き男の子が生まれるという救いがあるなら、アルタイの白い二歳のラクダを膝の下に抱き込んでやろう」と言って勝利する。そして、馬の聖別をするために、競馬のように、ハーンⅠと馬飼いの駿馬が追いかけて捕った馬を選び出した。このことによって、聖なる力が更新され、アルタイのエゼン・ハーンがハーンⅠに後継ぎの子どもを授けたのである。

また、こうした再生は次のことにも見られる。つまり、「アルタイ讃歌」でアリヤ・ホンゴルが淡黄色の馬に跨って移動することに対応して、「叙事詩アルタイ讃歌」でハーンⅠはアルタイのエゼン・ハーンに淡黄色の馬を捧げている。

このように考え合わせるなら、ハーンⅠの若返りは死後世界での転生となり、アルタイのエゼン・ハーンの再生を示していると思われる。したがって、アルタイのエゼンたるアリヤ・ホンゴルはハーンⅠの姿によって人格化されると考えられる。すなわち、アリヤ・ホンゴルというハーンⅠが想定されうる。そうすると、ここで現れるアルタイの地を支配するアリヤ・ホンゴルというハーンは、叙事詩「ジャンガル」に登場するアラグ・ウラン・ホンゴルを想起させる。この二つの叙事詩において主人公は極めて類似性をもっていることが全く偶然と思われない。そこで、藤井の研究によって示させたように、オイラト・モンゴルにおける歴史人物である、オリヤンハイ集団の領主「ホンゴル」とホシュト集団の領主「ホンゴル」を叙事詩の主人公と考え合わせるなら、歴史と叙事詩そしてアルタイのエゼンの人格化は深く関わっているように思われる。

五．まとめ

すでに見てきたとおり、「アルタイ讃歌」および「叙事詩アルタイ讃歌」の三部において、主人公はそれぞれアルタイ・エゼン、ハーンⅠ、息子となっている。「アルタイ讃歌」と叙事詩の関係からみると、実際に叙事詩の語りにおいて、「アルタイ讃歌」は不可分の関係にあるのであって、「叙事詩アルタイ讃歌」において「讃歌」と「叙事詩」が一体になっていることから、この三者の主人公が綿密な関係にあるかと思われる。

「アルタイ讃歌」と「叙事詩アルタイ讃歌」の考察からみるなら、アルタイのエゼン・ハーンは、すなわち、ハーンⅠに後継ぎの子供を授ける聖なる存在である。この聖なる存在は、す

なわち、ハーンⅠの他界における再生であり、このことによって現世における「ハーン」の位が空く。ここに聖なる存在に授けられた生命が生まれて、次のハーンⅡとなる。このように、第一部では聖なる他界、第二部では他界とこの世に跨る世界を語り、第三部ではハーンⅡの成長といったこの世を対象として語られているとみることができる。そのため、この三部は一見独立した内容をもつことにも関わらず、第一部の「アルタイ讃歌」とハーンとその息子を語る第二部と第三部とは構造上、切り離せない関係にあり、したがって、三者の主人公について輪廻を考えることができよう。つまり、第1部では聖なるアルタイのエゼンを称えるに対して、第二部では聖なる存在の再生と人間世界におけるハーンⅡの誕生が示され、第三部では新しく誕生した生命が再びエゼンの加護を受けることが語られる。このことから、アルタイのエゼン・ハーンは、ハーンⅠとハーンⅡの祖先であるとも考えられる。

こうした考えを踏まえて、前述の三と四の分析を合わせるなら、アルタイ・エゼンの特質は次のようにまとめることができよう。すなわち、アルタイ・エゼンは親族と考えられる十三のアルタイから供犠をする高い存在である。このエゼンは、アルタイの土地の全体を司って、狩猟採集に最も関心をもつ。また、アルタイ・エゼンは人間の子孫を見守り、「子どもを授ける」役割をもっている。

こうしたアルタイ・エゼンは空間的には人間の世界の上に存在する。このエゼンには具体的な姿が認められておらず、アルタイの自然全体を抽象的に示していると考えられる。その人格化が駿馬を乗り物に、アルタイの土地を行き来するアリヤ・ホンゴルである。したがって、アルタイ・エゼンは語り手の世界において祖先と考えられることが可能である。このことに、「叙事詩アルタイ讃歌」における切り離せない三部の構造を考え合わせるなら、アルタイ・オリヤンハイにおける「アルタイ讃歌」と叙事詩の綿密な関係は本来先祖に対する語りの意味が込まれたのではないかと思われる。

参考文献

一．日本語文献

青木富太郎「モンゴル人における火と爐」『高知大学学術報告』一巻十七号　一―十七　一九五二

内田吟風『北アジア史研究―匈奴篇―』一九七五　同朋舎・出版部

江上波夫「東亜遊牧民の典型としての蒙古民族」『帝国学士院東亜諸民族調査室報告会記録』一九四一　帝国学士院東亜諸民族調査室

エリアーデ・ミルチャ（久米博訳）『太陽と天空神』一九七四　せりか書房

『聖なる空間と時間』一九七四　せりか書房

大林太良『葬制の起源』一九六五　角川新書

『神話学入門』一九八五　中公新書
小沢重男『素顔のモンゴル―未踏のアルタイ山塊に拝む―』一九七〇　芙蓉書房
愛宕松男（訳注）『東方見聞録』（全二巻）一九七〇　平凡社
加藤晋平（監修）『アルタイ・シベリア歴史民族資料集成―日本人と文化の北方起源を探る―』一九八九　柘植書房
後藤富男「モンゴル族におけるオボーの崇拝」『民族学研究』四十七号　一九五六
「東西文化の交流とモンゴル遊牧民　オボク制社会から」『東洋学術研究』：四十四～五十九　一九七〇
『内陸アジア遊牧民社会の研究』（アジア史研究叢書）一九六八　吉川弘文館
後藤十三雄『蒙古の遊牧社会』一九四二　生活社
カズノー・ヴィ・J　宇波彰　訳『儀礼：タブー・呪術・聖なるもの』一九七三　三一書房
佐藤正衛『北アジアの文化の力』二〇〇四　新評論
清水昭俊「火の民族学」『日本古代文化の探究　火』（大林太良編）一九七四　社会思想社
蓮見治雄「モンゴルのしきたりと馬」『季刊民族学』七号　一九七九
羽田　明「西套厄魯特の起源」『神田博士還暦記念』（書誌学論集）六五五～六六一　一九五七
ハルヴァ・ウノ（田中克彦訳）『シャマニズム　アルタイ系諸民族の世界像』一九七一　三省堂
バンザロフ　ドルヂ（白鳥庫吉訳）「黒教或は蒙古人におけるシャマン教（カザン帝国大学学事録一八四六年三巻）」『亜細亜学報』：一～六二　一九四二
ユール・ヘンリー　鈴木俊（他訳）『東西交渉史』一九七五　原書房
藤井麻湖『伝承の喪失と構造分析の行方』二〇〇一　日本エディタースクール出版部
『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』二〇〇三　風響社
ブルジェヴァスキー・ニコライ・M　高橋勝之（他訳）『蒙古と青海』一九八一　原書房
ポターニン『西北蒙古の童話と伝説―種族・社会生活・迷信1』東亜研究所　一九四五
松田市政「西夏の死都カラーホトの調査の概要について」『東方学報』一三六～一五六　一九五〇
松田壽男『シルクロード紀行』二〇〇六　岩波書店
村上正二『モンゴル秘史―チンギス・ハーン物語』一―三　一九七六　平凡社
上村　明「英叙事詩の語り方『ハイラハ（xaɣtax）』について―アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩とエスニシティ」二〇〇七
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kamimura/articles/iltgel_2.html

山田信夫「テュルクの聖地ウトュケン山ーウトュケン山にかんする覚書ー」『北方アジア遊牧民族史研究』一九八九　東京大学出版会
米内山康夫『蒙古及び蒙古人』一九四三　目黒書店
歴史教育者協議会　監修『モンゴル・シベリア・中国西北部の歴史』一九九八　あすなろ書房

二．モンゴル語文献

Erdembayatur《Öng örgen alaša》（豊かなアラシャ）二〇〇六　Öbör mongγol-un soyol-un keblel-un qoriy-a
Sainǰiryal《Mongγol takily-a》（『モンゴル祭記』）二〇〇一　Ündüsüten-u keblel-un qoriy-a
W.Sainčoγtu《Ami-iyn sitülge》（生命崇拝）一九九八　Öbör mongγol-un arad-un keblel-un qoriy-a
Süngrub《Baraγun keid-iyn teüke》（『南寺史』）二〇〇四　Ündüsüten-u keblel-un qoriy-a
Č.Sengge《Mongγol-un erten-u angnal suyul-un sudulul》（『古代モンゴル狩猟文化研究』）二〇〇四　Ündüsüten-u keblel-un qoriy-a
Bayatur《Alaša inügel maytayal-yin tegübüri》『アラシャ祝詞』）一九八八　Öbör mongγol-un soyol-un keblel-un qoriy-a
Kürelša nar《Qurčin böge mörgül-un sudulul》（『ホルチン・シャマニズム研究』）一九九八　Ündüsüten-u keblel-un qoriy-a
W.Heissig（ハイシッヒ）（Altanbayan-a orčiγulugsan）《Mongγol-un šasin surtaqun》（『モンゴルの宗教』）一九九八　Öbör mongγol-un arad-un keblel-un qoriy-a
D.taya《Sinǰiyang-un Öirad J̌angγarčid-un keb namba-iyn asaγudal-du》《Sinǰiyang-un < kele ba orčiγulγ-a>sedkül》nige düger kuγučaγ-a　二〇〇五
J̌.Čoloo《Mongγol arad-un bayaturliγ tuuli》一九八九　Öbör mongγol-un suryan kümüǰil-un keblel-un qoriy-a

三．漢文文献

何星亮《阿尔泰乌梁海人的宗教信仰初探》《民族研究》第一期　一九八六
岑仲勉〈外蒙、於都斤山、〉《国立中央研究院歴史語言研究所集刊》三五七一三六九　一九三九

四．ドイツ語文献

Gahs（ガース）〝Alexander Blutige und unblutige opfer bei den altaischen hirtenvolkern〟（『アルタイ系民族における出血供犠と無血供犠』）Settimana internazionale di etnologia religiosa: IVa sessione,Milan,17-25 Sept　一九二六

五．資料

【資料一】アルタイ・ハイラハンの三つのテキスト：藤井麻湖『伝承の喪失と構造分析の行方』（テキストA、B、C）二〇〇一　日本エディタースクール出版部
【資料二】「叙事詩の前に謳う讃歌」：J．ツォロー『モンゴル英雄叙事詩』一九八九　内蒙古教育出版社

（す・ちん／千葉大学大学院）